



## 「諸色峠谷底下り」を素材にした授業展開

私立海城高等学校 横井成行

色とりどりの着物を着て擬人化されたモノの値段(諸色)が、峠から谷底に真さかさまに落ちていく。多くは「こうつきを(突き落)とされてはたまらぬ」、「ひどきめに」あった、と嘆く。1880年代前半、「松方デフレ」の猛威のなかで、いかに諸物価が下落したかを、たくみに示している。「絵解き」してみせながら、この時期の社会相に対する理解を生徒とともに深めていきたい。左端に「明治十六(1883)年 ようしゅうちかのぶ 楊州周延筆」とあり、新潟出身で幕末～明治にかけての「錦絵」画家の作品であることがわかる。恰好の「松方デフレ」さなかの同時代資料だ。

ここでは、日本史特有のとらえ方もふまえて、もう一つの見方―「松方デフレ」は、19世紀末の「欧米大不況」(1873年～1896年)と揆を一にしたグローバル・ヒストリーの中に位置づく可能性―をも示してみたい。生徒たちの視野が世界に広がると考えられるからである。

当時の英国を中心とする欧米社会は、アメリカ大陸における耕地面積の拡大や輸送手段の改善も背景に、農産物や工業品の生産過剰が原因で卸売物価が大幅に下落しており、欧米諸国が金本位制をとったので通貨供給量が収縮する一方、金の産出はなかったといわれる。カナダ・南アフリカ・オーストラリアなどでの金産出が復活するのは「欧米大不況」の収束後のことだ。だから、諸物価の下落は「世界の趨勢」であった。

ひるがえって、日本はどうか。明治維新以来、政府は不換紙幣を濫発し国内で流通する通貨には何の保証もないまま、殖産興業、鉄道敷設、西南戦争などの「急場」をしのいできたのだ。いわば、目の前の課題を解決するのに必要な費用をすべてツケにしてきたのだ。そのツケを払うべき時がきたのが、1880年代であった。なおも、鉄道敷設などに外資をアテにして不換紙幣の濫発を続けようとした大隈重信―佐野常民大蔵卿のインフ

レ政策に、外資導入を危惧した明治天皇の判断で終止符が打たれたあと、大蔵卿になったのが松方正義であった。

松方は、市場に出まわる不換紙幣を回収して日本の通貨「円」に銀正貨との兌換性と信用を得るために、中央銀行としての「日本銀行」を設立した(1882年)。その結果、米国式の「国立銀行」がまちまちに発券してきた不換紙幣や、政府がそのつど発券してきた不換紙幣は回収される道筋がついた。貨幣価値は上がったが、諸物価は急落した。とくに、米・生糸・繭・水産物・茶は当時の日本が海外に大量に輸出をして銀正貨を獲得する、いわば「切札」であった。茶を除く全品目は、いずれも峠から落ちて谷底に位置づけられて嘆く。前述の「世界の趨勢」では、これらの品目が高値で取り引きされる可能性はなかった。しかも、茶ですら最大の取り引き国であった米国でも、日本茶への需要は低下していたといわれる。

そこで、日本国内ではどのような変動が起きたか。インフレ期に高値で取り引きされた米・繭・生糸は、地主はおろか自作農・小作農が農産物市場に出荷し現金を手にする最有力の収入源だった。ところが、安値での取り引きしか期待できなくなると、彼らの現金収入は激減した。一方、彼らは地券をもつ限り、定額現金の地租納入を義務として負う。つまり、収入源の枯渇した人々の上に定額地租が重く落ちてきたのだ。だから、定額地租を払えない中小地主・自作農は、まず地券と土地を余裕のある大地主などに売却して負担を軽くした。が、それは彼ら自身の転落につながったし、現金を手にしなくなった小作人たちは都市部など現金を手にする機会の多い場へ移動を余儀なくされた。画面右下の「田地持」の「これ〜そう下りられてはたまらぬ」や、「小作人」の「だんな(「旦那」=地主・自作農を指す)よりをれ(俺)がたまらぬ」という嘆きは切実である。一方、土地を

集積した大地主たちは、やがて景気が回復してくると、小作料だった農産物現物を農産物市場に出して得た収入を原資に鉄道・銀行・鉱山・紡績など産業経営に乗り出し、都市に移り住む者も輩出する。彼らは20世紀前半にかけて不在地主、寄生地主とよばれる存在に成長する。

つまり、「松方デフレ」期には地主や自作農たちの解体が始まり、生活苦をもたらした政治への不満が蓄積される。ゆえに彼らは進んで「自由民権運動」に関与し、農村民権を支えた。

それでは、こうした前提にたつて、生徒には、「絵解き」をしながら次のような発問をしてみよう。

①物価の下落はどんなモノに及んでいるかな。

絵をよく見てみよう。

②とくに、米・生糸・絹などは、値段が落ちきって谷底に描かれているが、このことは当時の日本の貿易にとってどんな意味をもっていただろうか。幕末以来の貿易で、日本の輸出の主力品目だったのは何かに注目して話し合おう。

③こうした物価下落のなかで生活苦におちいったのはどのような社会層の人々だったか考えてみよう。とくに、地租が、定額現金納だったことを考慮に入れて考えてごらん。さて、生徒の反応はどうか。

①に関しては、「米・綿・材木など生活に関係のあるものばかりですね」とA君。「でも、石屋、大工などの手間賃も落ちているということだから、みんなが生活に困ったということですね」とBさん。

②に関しては、「幕末の貿易での輸出品としては、生糸とその製品としての絹織物と茶が主要产品目だった、と習いました」とC君。「そのとおり。それが安値でしか売れない背景には、1873年～1896年まで続く『大不況』が欧米をおおっていて、ほとんどの品目が安値でしか取り引きされなかったんだ。つまり、日本の農民がいくら質のいい繭や生糸をつくっても、高値で売れないから現金収入源としては期待できないわけ。それに、近年の研究では松方財政の前からすでにデフレ傾向だったことが指摘されているんだ」と説明しておこう。「お茶はどうだったんですか?」とDさん。「米国

がかなり日本のお茶を輸入していて、緑茶に砂糖とミルクを入れて飲む習慣が根づいていたという研究もある。でも、米国議会が『粗悪不正茶輸入禁止条例』（1883年）を成立させたので日本茶の輸入が制限され、嗜好がコーヒーを飲む方に変化した」と補足しておく。「だから、お茶も余って値段が下がったんですね」とA君が納得顔だ。

③に関しては、「それまで大隈財政でインフレだったから高値で米や生糸などの農作物が売れたわけですね。だから、一番もうからなくなった農民です」とA君が続ける。「ちょっと待ってくれ。一口に『農民』といっても、さまざまな人がいるよ。地主・自作農・小作人などだね。そして、土地を所有し、地券を持っている地主・自作農の人たちは、定額地租を現金で納入する義務を負っていたから、収入が減ったのに義務として出さなければならない金額は変わらないんだよ」と理解をうながす説明をしてみる。すると、「つまり、今まで200円の収入があったときの50円の地租を出すことは楽だったけど、100円や80円に収入が落ちたときの50円の地租の支払いは厳しいということです」とBさん。「その通りだ。当然、地主や自作農がたよりにしていた農産物を取り引きする市況も下落するからね。そこで、彼らは、地租負担の軽減を強く求めるし、払いきれない中小の地主や自作農の人たちは、大地主などに地券・土地を売り払って没落する者も数多く出てくる。小作人たちだって、生活に現金が必要だから、現金を手にする仕事がある都市部へ移るよね。だから、この時期に自由民権運動の担い手が、生活危機に根ざす政治要求をもつ彼らに変化するんだな」と背景を説明しておこう。

#### 【参考文献】

山本有造「明治維新期の財政と通貨」『日本経済史3 開港と維新』（岩波書店、1989年）

金井雄一ほか「世界経済の歴史 グローバル経済史入門」（名古屋大学出版会、2010年）

Steven J. Ericson（ダートマス大学歴史学部），“The “Matsukata Deflation” Reconsidered: Financial Stabilization and Japanese Exports in a Global Depression, 1881—85”, *The Journal Of Japanese Studies*, 40-1 (2014)